

《特集》 子ども・若者の貧困と学習支援



生活困窮世帯への学習支援

2015年度、独立行政法人福祉医療機構（通称WAM）社会福祉振興助成事業を受けて「生活困窮世帯への学習支援」に取り組んできました。

その報告会を兼ねて「子ども、若者の貧困を考えるシンポジウム in 宮崎」を、2016年3月13日（日）に去川こども村（旧去川小学校）で行いました。定員を大幅に超える64名の参加で、「子どもの貧困」に対する関心の高さがうかがえました。（さとわ企画にイベント委託）

講演要旨（盛満弥生宮崎大学講師）

子どもの貧困はここ4～5年で急速に深刻化し、貧困家庭は6人にひとりといわれている。宮崎は全国で6番目に高く、5人にひとりの割合になっている。宮崎県は子どもの貧困対策に158億を予算化し、これから各市町村で具体化されていく。民間の動きも出てきている。

貧困家庭の子どもは、遊ぶ、学ぶ、文化に触れる機会を奪われてしまう。いろいろな立場の人達が繋がり、薄く細い糸であっても、多くの人に関わって支援する方がいい。

貧困家庭だけではなく、困っている人達をみんなで一緒に助け合っていく雰囲気づくりが大事。支援は困っている子に対してだけではなく、それ以外の子ども達をどう育てていくかにも関わる。

困っている人がいたら、一緒に考えていけるような仲間づくり、人間関係づくりを育てたい。困っている子どものことを我が子のように関わっていける、そんな大人をひとりでも増やしていきたい。

井戸端会議要旨

前半は「こんなことやってるよ！」がテーマ

パネリストがそれぞれの活動や想いを語る。その後、参加者からは、親子食堂、当事者からの意見、行政の自立相談センター、わかば相談支援、サポステ就労支援、宮崎子ども支援研究会、通信高校の元教師（学習支援）、みんなの居場所など、いろいろな立場から報告される。

後半は「こんな風にやりたいね！」がテーマ

朝ご飯を地元の人達で提供していく場づくり、売れ残りパンの提供、寺子屋学習支援、自由に遊べる場所や時間の必要性などの意見も出る。これからの問題点として、支援や提供をするときに貧困かどうかの区別が難しいとの意見もあった。

他に、子育て支援と同時に親支援が大事なこと、弱さをみせられない社会で安心できる人や居場所が必要、食と情報の提供、助けを求めるスキルを育てたいなどの意見も出た。



ゆるやかなつながりのなかで



私自身が与えられた役割を十分に果たせたかという大きな反省が残るものの、このような充実したシンポジウムに参加する機会をいただきとてもありがたく思います。

これだけ時間をかけた事前打ち合わせ、事後反省会が行われ、登壇者同士はもちろんのこと、参加者間で立場や役職を超えた交流が生まれたシンポジウムは他にありません（私の限られた経験上ではありますが…）。子どもの貧困解決には一過性ではなく息の長い支援が必要であり、今回のような「ゆるやかな繋がり」が鍵であると改めて考えさせられました。（盛満弥生さん）

このシンポジウムを通し、支援は形も大事かもしれないが、結局「人」なのだと思っ感じた。参加された方々の思いが繋がって、いつかどこかで互いに支え合えるのだと思う。

学ぶことは冒険でもある。やればやるほど未知への好奇心が高まってくる。生きることに休みはなく、望まなくてもいろいろなことが起こってくる。いいことも嫌なことも。出会う子供たちが自分らしくマイペースで人生を送れるよう、これからも共に歩んでいきたい。（日吉香奈さん）



まずは参加者の温かい雰囲気がとても良かった。受付していても、講演を聴いていても、参加者の皆さんが温かい視点で、態度で聴いていらっしやるのがわかった。さらにお昼ご飯の時間も、バイキングでもっと混雑してしまうかと思いきや、和やかなランチタイム。しかも、とても美味しく、「人数増えたから、足りないかな？」という心配をよそに、すごいボリューム。お腹いっぱい食べられてとても幸せな気持ちになりました。

いざシンポジウムが始まると、すみません、借りてきた猫のようになってしまいました。貧困に関して、ほぼ素人の私が話しているのかな～、という思いがありました。しかし、亀澤さんがピンポイントの質問をしてくださり、参加者の皆さんも私の話や日吉さん、びよんさんの話を大きくうなずいたりして聞いてくださったので、安心して話することができました。特に、後半みんなで車座になって話した時は、本当に井戸端会議で、様々な意見が飛び交い、ひとりの参加者としてとても楽しかったです。このような会に参加できて、本当にすばらしい体験になりました。このつながりを今後どのようにさらに繋がっていくか、子どもに関わる大人の責任だと思えます。素敵な輪を拡げていきたいです。（鈴木直子さん）



参加者の方の発言が良かったです。シングルマザーで当事者だと言われる方のお話や、子ども食堂を運営しておられる方、民生委員さんと子どものつながりを作る小学校の取り組み、など。

後半では、居場所を運営しておられたり、準備中の食堂を考えておられる方などのお話も聞けました。本当に必要なひとに届くのか、との投げかけがあり、マーケティングの重要性を感じました。繋がる力が弱い人に届く方法を考えて行けたら、と思いました。（宇宙塵びよんさん）

こんなにも、子どもの貧困について考えたり、自由に意見を出し合ったりすることは、日常ではなかなかないと思った。自然の中にある旧去川小学校の音楽室の中でのシンポジウムは、参加者と主催者（講師、パネリスト含む）の垣根をはらい、リラックスした雰囲気の中で行われ、とてもよかった。

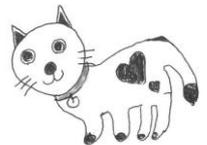
もう少し、参加者同士の交流の時間があるとよかったのかもしれない。このシンポジウムの繋がりが、それぞれの今後の活動に役立つことを祈りつつ、自分たちのできることをひとつひとつ行動に結んでいくことが大切だと思った。（井上さと子さん）



貧困の問題は、経済、政治、教育、福祉、医療などの問題が複雑に絡んでいます。それだけに各分野の連携がとても重要だといわれます。しかし、今の社会を見る時、あまりにも効率や競争、能力、成果が優先され、自己責任の名のもとに、格差を是認する風潮が否めません。

「助けてといえない」「弱さを見せられない」状況で、ひきこまざるを得ない子どもや若者が多くいます。「生活困窮世帯への学習支援」が当事者のレッテル貼につながることに思いが至りませんでした。どうも男性目線で制度や理屈から物事をとらえていたという反省から、今回のシンポジウムは女性中心で組ませていただきました。

全国的にも女性が運営する団体に成功例が多く（男性は環境整備）、女性の発想でとらえてみたいと思ったからです。井戸端会議という雑談、脱線 OK の形も良かったと思います。多くの人たちが発言してくれました。イベントが終わってからも自主的な井戸端会議が続いています。アメーバ的なつながりが既成の価値観へのとらえ直しになっていけばと期待しています。（亀澤克憲）



お問い合わせ（事務局）

〒880-8515 宮崎市原町 2-22

宮崎県福祉総合センター内ボランティアセンター 気付

特定非営利活動法人みやざき教育支援協議会

代表理事 亀澤克憲

Tel・Fax0985-41-4451 info@npomesc.jp